

娘の父親に対する評価に関する研究

下茂 郁佳*・桂田恵美子**

抄録：本研究では、娘の父親に対する評価に差を生み出す要因として、娘からみた両親の夫婦関係や父親との関わり、父親との別居経験を取り上げ、女子大学生を対象に質問紙調査を行った。また、現在の父親に対する評価に加えて、中学時代・小学時代の頃の父親に対する評価も想起して答えてもらい、娘の発達や成長によって父親に対する評価はどのように変化するのか検討した。調査の結果、現在の娘の父親評価と娘が認識する両親の夫婦関係、父親との関わりに関連がみられた。つまり、子どもの頃から現在まで娘に対して積極的に関わり、母親を大切に夫婦関係も良いと認知されている父親は娘からの評価も良く、良好な父娘関係を築けていた。また、現在の父親評価と娘が認識する夫婦関係により強い関連性がみられ、こちらの方が強い関連が示されたことから、娘の父親に対する評価には夫婦関係がより強い影響力をもつことが示唆された。また、娘の発達によって父親への評価は変化し、小学時代、現在、中学時代の順に娘の父親評価は良く、反抗期のピークである中学時代は最も父親への評価は低いことが確認された。

キーワード：父娘関係、父親評価、夫婦関係、父親との関わり

問題と目的

親子関係には父親と息子、父親と娘、母親と息子、母親と娘の4つのパターンがある。親子関係は子どもの人間形成の重要な要因として数多くの研究がなされているが、親子関係の中でも特に母親と娘に関する研究が多い。例えば、田中（1993）の研究では女性の場合、自我の発達への影響が最も強くみられたのは母親との関係であることが示されている。また、女性の発達には、特に自身の母親との関係性が幼少期だけでなく青年期以降においてもアイデンティティ発達や心理的適応において重要な機能を果たすことが示唆されている（北川, 2005）。それに比べて、父親と娘を扱う研究は極めて少ない。そこで本研究では、特に父親と娘の関係を取り上げることにした。

一言で「父娘関係」と言っても様々なかたちの父娘関係が存在し、一つの父娘関係を取り上げてみても娘の発達や成長に応じて父親に対する評価は変化するだろう。神谷・郭（1995）の研究では、「父親への反抗」のピークは中学時代であると述べられており、娘の発達段階によって父親に対する評価は変化することを示している。また、石丸（2013）は娘の父親への否定的な感情は思春期と比べて青年期には弱まる結果が出たが、娘の父親に対しての認知の仕方や娘の父親に対するイメージは中学生の頃にある程度できあがっており、そのパターンのまま成長していくものが多いとも述べている。本研究にお

いても研究の対象を女子大学生とし、回顧的ではあるが、小学生、中学生、大学生の3つの時代区分ごとの父親評価の評定を求め、娘の発達や成長による父親評価の変化について検討する。

父親の性格や態度、振る舞いは当然一人ひとり違い、様々な父親がいる。さらに、それに対する娘の捉え方も一人ひとり違う。娘の父親に対する感情や評価は様々であり、父親に対して否定的感情を持つ娘から、父親を肯定的にみる娘までいるが、このような差を生み出す要因は具体的にどのようなものなのであろうか。娘の父親に対する評価は日々の父親との関わりの中で完成した結果であるのかもしれないし、母親の父親に対する評価や夫婦関係が要因となって完成した結果であるかもしれない。

近年では女性の社会進出が叫ばれ、伝統的な性役割観から平等的な性役割観に変わりつつある。それに伴って、子どもの側の理想の父親像も変わり、家族に対する愛と理解ある父親や、家族サービスする父親、子どもと一緒に行動する父親がより望まれるようになってきた（小野寺, 1984）。また、多くの研究で親子関係と夫婦関係の関連について取り上げられており、父親と娘の関係を研究するには母親の存在を念頭に置かなければならない。つまり、娘の持つ父親像には、直接的な父親と娘の関係だけではなく、父親と母親の夫婦関係も多大な影響を及ぼしており、ある部分、娘は母親の眼を通して、父親を見ているとも言えるかもしれない（春日, 2000）。大

*関西学院大学文学部総合心理科学科

**関西学院大学文学部教授

島 (2013) は、息子の場合は母親の認識の影響を受けにくい、母親が父子の媒介者になりやすいのは父娘間であると述べている。これらの先行研究から考えられるのは、家庭生活の中で子どもに対して積極的に関心を持って家族のために時間を割き、妻を大切にするような父親は娘からの評価も良く、良好な父娘関係を築けるだろう。一方、子どもに対して無関心で愛情も示さず、妻に対しても批判的な父親は娘の父親に対する評価も否定的であり、良好な父娘関係を持つことができないだろう。そこで本研究では、娘の父親に対する評価に及ぼす要因の一つとして娘からみた夫婦関係を取り上げ、その関連性を検討する。

本研究では女子大学生を対象に、娘の父親に対する評価に差を生み出す要因について検討する。その要因として、父親との関わりや娘からみた両親の夫婦関係、父親との距離を取り上げて考えていく。また、現在 (大学生) の父親に対する評価を答えてもらう他に、中学時代や小学時代の頃の父親に対する評価も想起して答えてもらい、娘の発達や成長によって父娘関係、娘の父親に対する評価はどのように変化するのか検討する。対象者が大学一年生の場合、わずか数か月前まで高校生であるため、本研究では高校時代を除いた。

方 法

1. 調査日時、場所および状況

2014年9月24日と10月8日に関西学院大学で担当者の許可が得られた心理学関係の授業において、質問紙の配布及び回収を行った。

2. 調査対象者

関西学院大学に在学する女子大学生に質問紙を配布し、185名から回答を得た。分析においては、調査内容において記入漏れのない174名分のデータを使用した。

基本的属性については、両親共にいる者166名(95.4%)、一人親で父親のみ2名(1.1%)、母親のみで父親と小学校入学前に離れた者1名(0.6%)、小学校時代に離れた者3名(1.7%)、中学校時代に離れた者1名(0.6%)、高校時代から現在の間に離れた者1名(0.6%)であった。居住形態は核家族105名(60.3%)、拡大家族(両親と子ども以外の家族が同居している家族)18名(10.3%)、一人暮らし・兄弟のみ51名(29.3%)であった。また、核家族のうち両親ともに暮らしている者90名(51.7%)、一人親で母親と暮らしている者14名(8.0%)、一人親で父親と暮らしている者1名(0.6%)であった。拡大家族のうち両親共に暮らしている者13名(7.5%)、一人親で母親と暮らしている者5名(2.9%)であった。

また、子どもの頃から父親と一度も離れず暮らしてい

る者は129名(74.1%)、父親の転勤やその他の事情により一時的に離れたことがある者は45名(25.9%)であった。調査対象者の平均年齢は20.09歳(範囲:19~24)であった。

3. 質問紙の構成

本調査で用いた質問紙はフェイスシート、現在(大学生)の父親評価、中学時代の父親評価、小学時代の父親評価、娘が認識する夫婦関係、父親との関わりについての質問で構成されていた。

1) フェイスシート

フェイスシートには、家族構成・居住形態についての記入を求めた。家族構成については「両親ともにいる(父親と母親)」、もしくは「一人親である」のどちらかを選択するように求め、「一人親である」と回答した者にのみ、それは「父親」もしくは「母親」のどちらか聞いた。そして、「母親」と回答した者には両親の離婚あるいは死別、さらにその他の事情により、いつ頃父親と離れることになったのか、「小学校入学前」「小学校時代」「中学校時代」「高校時代から現在の間」のいずれかを選択するように求めた。居住形態については、現在同居している家族を「父親・母親・兄弟・姉妹・祖父母・その他・一人暮らし」の中から当てはまるものすべてを選択するように求めた。また、父親と子どもの頃から一度も離れず暮らしているのかについて、「はい」もしくは「いいえ」で回答してもらった。

2) 父親評価の測定

娘の父親に対する評価の測定には神谷・郭(1995)が作成し、使用している20項目の質問を使用した。「父親が好き」「父親を尊敬している」などの質問項目から成り、「1、あてはまらない」「2、あまりあてはまらない」「3、どちらともいえない」「4、少しあてはまる」「5、あてはまる」の5件法での評定を求めた。また、現在(大学生)に加えて、中学時代と小学時代の父親評価もふり返って答える形式をとった。いずれも得点が高いほど父親への評価は肯定的で、得点が低いほど父親への評価は否定的であるということになる。本研究における尺度の信頼性を確認するために、Cronbachの α 係数を算出したところ、現在の父親評価 $\alpha = .94$ 、中学時代の父親評価 $\alpha = .94$ 、小学時代の父親評価 $\alpha = .92$ と高い信頼性が確認された。

3) 夫婦関係の測定

娘からみた夫婦関係の測定には菅原・詫摩(1997)が作成し、小田切・菅原・北村・菅原・小泉・八木下(2003)でも使用されたマリタルラブスケール15項目の尺度を使用した。本来は夫婦が配偶者との関係を答えるようになっているが、本研究では大学生である娘が両親の夫婦関係を測定できるように、「お互い~ようだ」と

いう言葉を書き加えて使用した。「お互いがなしで過ごすことは辛いことのようにだ」「お互いの考えや気持ちをいつも分かっていたいようにだ」などの質問項目から成り、「1, 全くあてはまらない」「2, あてはまらない」「3, ややあてはまらない」「4, どちらでもない」「5, ややあてはまる」「6, あてはまる」「7, 非常によくあてはまる」の7件法での評定を求めた。また、「お互い～」と文言を変えたので、両親共ではなく、父親もしくは母親のいずれか一方のみがあてはまる場合は評定を半分の数値になるものとして判断し、評定するように教示した。得点が高いほど娘が認識する夫婦関係は良好で、得点が低いほど夫婦関係は悪いということになる。本研究におけるこの尺度の信頼性は $\alpha = .96$ と高い信頼性が確認された。

4) 父親との関わりの測定

過去・現在の父娘間の日常的な関わりの測定には小野寺 (1984) が作成し、使用している 12 項目の尺度を使用した。小野寺 (1984) では日常生活の中で父と娘はいかなる内容の会話を交し、行動を共にしているのか父娘関係を行動レベルで測定している。質問項目の中には「父親参観日、運動会、卒業式などにはきてくれた」「子どもの頃、家族旅行、海、山、プールなどにつれていってくれた」など子どもの頃に父親が親として娘にとってきた行動を測定する質問から、「父の仕事や職場のでき事について話をする」「政治・経済問題の話をする」などの現在の父娘間の日常的な関わりを測定する質問項目から成る。これによって要因の一つとして挙げている家庭的で積極的に娘との関わりを持つ父親であるのかを評定し、父親評価との関連を検討することができると考え、この尺度を採用した。「1, あてはまらない」「2, あまりあてはまらない」「3, 少しあてはまる」「4, あてはまる」の4件法での評定を求めた。得点が高いほど父親との関わりが多く、得点が低いほど父親との関わりは少ないということになる。本研究におけるこの尺度の信頼性は $\alpha = .81$ と高い信頼性が確認された。

結 果

1. 各尺度の記述統計量

それぞれの尺度の合計点を算出し、その尺度得点とした。各尺度得点の平均値、標準偏差、最小値、最大値を Table 1 に示した。

2. 娘の発達や成長による父親評価の変化

Table 1 に示されているように、父親評価の平均値 (SD) は現在が 70.86 (15.75)、中学時代が 64.16 (16.24) であった。この間で変化があるかどうかを検討するため、対応のある t 検定をおこなったところ、この差は有意であった ($t(173) = 7.74, p < .001$)。また、

Table 1 尺度ごとの記述統計量

	N	平均値	標準偏差	最小値	最大値
父親評価 (現在)	174	70.86	15.75	22	100
父親評価 (中学時代)	174	64.16	16.24	28	100
父親評価 (小学時代)	174	74.51	13.27	32	100
娘が認識する夫婦関係	174	61.53	20.98	15	105
父親との関わり	174	29.16	6.49	13	45

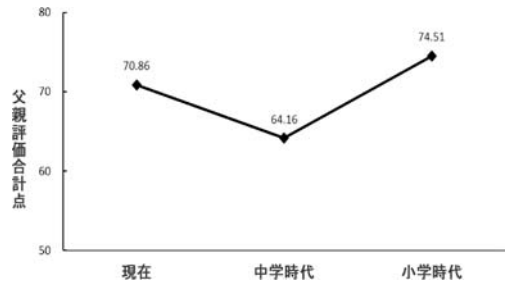


Fig. 1 時期による父親評価合計点

小学時代の父親評価の平均値は 74.51 (13.27) であり、現在との間で変化があるかどうかを検討するため、対応のある t 検定をおこなったところ、この差は有意であった ($t(173) = -3.98, p < .001$)。さらに、中学時代と小学時代の間で変化があるかどうかを検討するため、対応のある t 検定をおこなったところ、この差は有意であった ($t(173) = -11.39, p < .001$)。Fig. 1 からわかるように、小学時代、現在、中学時代の順に娘の父親評価は良いといえる。

3. 父親評価と父親との関わり・娘が認識する夫婦関係の関連

現在、中学時代、小学時代の父親評価得点、父親との関わり得点、夫婦関係得点を算出し、相関を求めた結果を Table 2 に示した。父親との関わりと現在の父親評価得点の相関は $r = .59$ 、中学時代の父親評価得点との相関は $r = .50$ 、小学時代の父親評価得点との相関は $r = .50$ といずれも中程度の正の相関が示された。また、夫婦関係と現在の父親評価得点の相関は $r = .67$ 、中学時代の父親評価得点との相関は $r = .49$ 、小学時代の父親評価得点との相関は $r = .50$ といずれも中程度の正の相関が示された。

各発達時期の父親評価得点それぞれの相関、父親との関わりと夫婦関係の相関も求めたところ、現在の父親評価と中学時代の父親評価の相関は $r = .75$ と強い正の相関がみられた。現在の父親評価と小学時代の父親評価の相関は $r = .67$ 、中学時代の父親評価と小学時代の父親評価の相関は $r = .69$ といずれも中程度の正の相関が示された。父親との関わりと夫婦関係においても $r = .47$ と中程度の正の相関が示された。

Table 2 父親評価, 夫婦関係, 父親との関わりの相関

	父親評価合計点 (現在)	父親評価合計点 (中学時代)	父親評価合計点 (小学時代)	夫婦関係合計点
父親評価合計点 (中学時代)	.75**			
父親評価合計点 (小学時代)	.67**	.69**		
夫婦関係合計点	.67**	.49**	.50**	
父親との関わり合計点	.59**	.50**	.50**	.47**

** $p < .001$ **Table 3** 父親評価と夫婦関係, 父親との関わりの偏相関

	父親評価合計点 (現在)	父親評価合計点 (中学時代)	父親評価合計点 (小学時代)
夫婦関係合計点	.44**	-.07	.10
父親との関わり合計点	.25*	.05	.13

** $p < .001$ * $p < .01$ **Table 4** 父親評価合計点と現在の父親の有無

		N	平均値	標準偏差
父親評価合計点 (現在)	一人親 (母親)	6	56.50	21.01
	両親・一人親 (父親)	168	71.37	15.37
父親評価合計点 (中学時代)	一人親 (母親)	6	56.83	20.82
	両親・一人親 (父親)	168	64.42	16.07
父親評価合計点 (小学時代)	一人親 (母親)	6	66.50	20.14
	両親・一人親 (父親)	168	74.79	12.96

** $p < .001$

各発達時期の父親評価得点, 父親との関わりと夫婦関係の間にも相関が示されたため, 主要な関連 (父親評価と夫婦関係, 父親との関わり) のみ偏相関を求めた (Table 3 参照)。相関を求める 2 つの変数以外の 3 変数を制御変数として求めた結果, 父親との関わりと中学時代の父親評価, 父親との関わりと小学時代の父親評価の相関, 夫婦関係と中学時代の父親評価, 夫婦関係と小学時代の父親評価はいずれも有意な偏相関がみられなかった。現在の父親評価にのみ関連がみられ, 父親との関わりと現在の父親評価の間は $r = .25$ と弱い正の偏相関がみられ, 夫婦関係と現在の父親評価の間は $r = .44$ と中程度の正の偏相関が示された。

4. 父親評価と現在の父親の有無

両親の離婚あるいは死別などの理由により, 父親がいない娘は父親と接する機会は父親がいる娘に比べて極端に少なく, 父親評価にも関連していると考えた。そこで, 娘の父親評価と現在の父親の有無との関連をみるために, 一人親で育て親が母親である者と, 両親がいる者・一人親で育て親が父親である者の 2 つのグループに分け, 分析を行った。

Table 4 に示したように, 現在の父親評価は, 一人親で育て親が母親である者の平均値 (SD) は 56.50 (21.01), 両親がいる者・一人親で育て親が父親である

者の平均値は 71.37 (15.37) であった。中学時代の父親評価では一人親 (母親) 56.83 (20.82), 両親・一人親 (父親) 64.42 (16.07), 小学時代の父親評価では一人親 (母親) 66.50 (20.14), 両親・一人親 (父親) 74.79 (12.96) であった。いずれも一人親で育て親が母親で現在父親のいない者よりも両親がいる者・一人親で育て親が父親である父親のいる者の方が父親評価の平均値は高い結果であった。この間に差があるかどうかを検討するため, 対応のない t 検定を行ったところ, この差は現在の父親評価においてのみ有意な差がみられ ($t(172) = -2.30, p < .05$), 中学時代 ($t(172) = -1.12, n.s.$) と小学時代 ($t(172) = -1.51, n.s.$) には有意な差がみられなかった。

また, 単身赴任などでこれまでに父親と離れて暮らした経験の有無, 両親の離婚経験の有無, 父親と離れて暮らしているかどうかによる違いを分析したが, 有意な差は見られなかった。

考 察

本研究では女子大学生を対象に, 娘の父親に対する評価に差を生み出す要因について検討した。先行研究から考えられる要因として, 娘からみた夫婦関係や父親との関わり, 父親との距離を取り上げて娘の父親評価との関連性を検討した。また, 現在 (大学生) の父親に対する

評価を答えてもらう他に、中学時代・小学時代の頃の父親に対する評価も想起して答えてもらい、娘の発達や成長によって父娘関係、娘の父親に対する評価はどのように変化するのか検討した。本研究で得られた結果について考察していく。

まず、父親評価と父親との関わりについては、娘の現在、中学時代、小学時代の父親評価との間に関連がみられたが、偏相関の結果からは現在の娘の父親評価にのみ関連が示された。この結果は、娘との接触が多いほど父親の魅力は娘に高く評価されるという先行研究の結果(小野寺, 1984)と一致するものである。小野寺(1984)は、特に社会生活について語る父親との接触の多少が重要な要因であり、自分の仕事のことや社会情勢などについて話をしてくれる父親との関わりの方が、ただ単に親としての行動をとる父親との関わりよりも現在女子大学生である娘からみてより魅力的であり、評価が高くなると述べている。今回、父親との関わりを測定するために使用した尺度は小野寺(1984)が作成し、彼女の研究でも使用されているものであるが、子どもの頃(特に小学時代)に父親が親として娘にとってきた行動を測定する4つの質問項目と現在の父娘間の日常的な関わりを測定する8つの質問項目から成る。つまり、どちらかと言うと現在の父娘関係が多く反映された尺度であった。その為、現在の父親評価のみに関連が見られたとも考えられる。今後、子どもの頃の父親とのかわりや現在の父親との関わりを別の変数として関連を見てみる必要があると思われる。

次に、父親評価と夫婦関係について、現在、中学時代、小学時代の父親評価と娘の認識する夫婦関係との間に関連がみられた。しかし、Table 3で示した偏相関からとらえると、現在の父親評価のみ関連が示されている。この結果から、現在の父親評価と娘が認識する夫婦関係は関連し、両親の夫婦関係が良好であると捉えている娘ほど現在の父親への評価は高いことが言える。父親評価には父親と娘の直接の親子関係だけではなく、夫婦関係が娘にとって重要であることが示唆される。また、偏相関係数が娘の認識する夫婦関係の方が高いことから、娘と父親の直接的な関わりよりも娘が認識する夫婦関係の方が父親評価により強い影響力を持つことが示唆される。このことから、父親は娘から良い評価をうける(娘に好まれる)ためには、娘との関係だけを大切にするのはではなく、妻である母親との関係を良好にしなければならぬと言える。

父親評価と現在の父親の有無との関連については、娘の父親への評価は現在、中学時代、小学時代いずれも一人親で育て親が母親である父親のいない者(6名)よりも両親がいる者・一人親で育て親が父親である父親のいる者(168名)の方が父親評価の平均値は高い結果であ

った。この差は現在の父親評価にのみ統計的な有意差がみられ、中学時代と小学時代には有意な差がみられなかった。現在の父親評価にのみ有意差がみられた理由として、被験者それぞれで父親と離れた時期が異なるため、6名とも父親のいない状態になる時期は「現在(大学生)」のみであることが一つ挙げられる。また、現在母親が一人親となっている場合、死別または離婚によるものと考えられるが、一般的に離婚の場合は夫婦関係が悪くて離婚に至るので、離婚という状態では夫婦関係を良好と捉えていないと考えられ、父親評定が低くなったと考えられる。しかし、本研究では、この6名全員が離婚によるものかどうかは明らかではないので、今後の研究では、現在母親の一人親となっている理由も明確にした方が良いと思う。更に、一人親で育て親が母親であるのは6名と少ないため、この6名が特異なサンプルである可能性もあり、現在父親がいない者の方が父親評価が低いという結果に関しては追試が必要である。

本研究ではさらに娘の発達や成長による娘の父親評価の変化を検討した。娘の父親評価の平均値を比較したところ、小学時代、現在、中学時代の順に高かった。また、すべての間で有意な差がみられ、小学時代、現在、中学時代の順に娘の父親評価は良いことが示された。この結果は、“父親への反抗”は中学時代がピークであるとする神谷・郭(1995)の研究結果と一致する。本研究でも娘の発達によって娘の父親への評価は変化し、反抗期のピークである中学時代は最も父親への評価は低いことが確認された。

最後に、本研究での限界を述べる。先述したように、父親との関わりを測定するために使用した尺度の項目の偏りから、現在と過去の父親の関わりを別々に測定することが望ましいと思われる。また、夫婦関係も現在の夫婦関係しか測定していないので、現在の父親評価にしか関連が見られなかった可能性もある。両親の夫婦関係についても、過去と現在別々に測定すべきであったと思われる。そのためには、大学生だけでなく、小学生、中学生からもデータを集め、より大規模な横断研究が望まれる。また、本研究では、娘の父親評価に影響するものとして、父親との関わり、両親の夫婦関係しか見ていない。しかし、もっと様々な影響要因があると思われる。例えば、父親の家事への貢献などの性役割に関する変数やボランティアなど仕事以外での社会貢献などの変数も今後の研究においては含めるべきであろう。

引用文献

- 石丸綾子(2013). 女子大学生の父親への否定的感情に関する研究：現在と中学時代の回想を比較して。九州大学心理学研究, 14, 125-137.
- 神谷俊次・郭小蘭(1995). 父娘関係、父親像と娘か

- らみた父親の魅力. アカデミア人文・社会科学編, 61, 195-227.
- 春日由美 (2000). 日本における父娘関係研究の展望 -娘にとっての父親-. 九州大学心理学研究, 1, 157-171.
- 北川朋子 (2005). 母娘関係の発達の変容: ライフサイクルを展望して. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 心理発達科学, 52, 271-273.
- 小田切紀子・菅原ますみ・北村俊則・菅原健介・小泉智恵・八木下暁子 (2003). 夫婦間の愛情関係と夫・妻の抑うつとの関連 -縦断研究の結果から. 性格心理学研究, 11, 61-69.
- 小野寺敦子 (1984). 娘からみた父親の魅力. 心理学研究, 55, 289-295.
- 大島聖美 (2013). 夫婦間の信頼感と両親からの支持的関わりが若者の心理的健康に与える影響の男女差. 発達心理学研究, 24, 55-65.
- 菅原ますみ・詫摩紀子 (1997). 夫婦間の親密性の評価 -自記入式夫婦関係尺度について. 精神科診断学, 30, 155-166.
- 田中正 (1993). 親子関係と自我の確立: 青年期後期の女子を対象として. 名古屋文理短期大学紀要, 18, 7-14.